

Keiba Global Front Line



競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します

合田 直弘

先月のこのコラムで、26年の英国ダービーで有力視されているピエールボナード（牝2）を紹介した。するとその後、読者から、オークスの本命はどんな馬ですかとお問い合わせを頂戴した。そこで今月は、26年6月5日にエプソムダウン競馬場で行われる第248回G1英オークス（芝12F6y）へ向けた前売りで、ブックメーカー各社が7〜9倍のオッズを掲げて1番人気に推しているダイヤモンドネックレス（牝2）をご紹介します。

父は、3歳だった21年に、仏国における春の3歳2冠に加え、G1エクリプスS（芝9F209y）、G1愛チャンピオンS（芝10F）を制し、欧州年度代表馬の座に輝いたセントマークスバシリカで、その初年度産駒の1頭となる。22年に愛国のクールモアで種牡馬入りした際には6万5千ユーロ（当時のレートで約858万円）の種付け料が設定され、この年の新種牡馬の中では最も期待が高い1頭と目されていた。ところが、24年の1歳馬市場に初年度産駒たちが登場すると、マーケットの評価はそれほど高いものではなかった。この年、欧州の1歳市場に上場された78頭のセントマークスバシリカ産駒のうち、購買されたのは58頭で、売却率は74.4%に留まった。購買された58頭のうち44頭は、日本円に

して5千万円以下の価格での購買で、鳴り物入りでスタッドインしたにしては、マーケットを牽引するほどの役割は担えなかったのだ。

ただし、そんな中、市場で飛びぬけて高い評価を受けたセントマークスバシリカ産駒が、ダイヤモンドネックレスだった。仏国の名門モンソー牧場からアルカナ社主催のドゥヴィル8月1歳セールに上場された同馬は、クールモアのM.V.マグナー氏にセッション最高値となる170万ユーロ（当時のレートで約2億7991万円）で購買されたのだ。

高値を呼んだ背景にあったのが、同馬の牝系だった。ダイヤモンドネックレスの母は、バリロンシヤンのLRラセーナ賞（芝2200m）勝ち馬ブルデンジアだ。すなわち同馬は、G1愛オークス（芝12F）勝ち馬チキータや、G1マッキノンS（芝2000m）勝ち馬マジックワンドの半妹にあたるのである。

A・オブライエン厩舎に入厩したダイヤモンドネックレスは、8月9日にカラで行われたメイドン（芝7F）でデビュー。10頭立てとなった中、ダイヤモンドネックレスはオッズ10倍の5番人気と、馬券ファンの評価はさほど高いものではなかった。そもそもからして、オブライエン師の管理馬は初戦の勝ち上がり率が高い方ではなく、また厩舎の主戦騎手R・ムー

アがこのレースでは、同厩でここがデビュー14戦目だったミネルヴァ（牝2、父フランケル）に騎乗していたことから、こは「見送り」と判断したファンが多かったのも無理はなかった。ところが、W・ローダーンが手綱をとったダイヤモンドネックレスは、2着ミネルヴァに1.1/2馬身差をつけてデビュー勝ちを果たしたのだ。

続いて、9月15日にレバースタウンで行われたLRインガベルS（芝7F）に駒を進めたダイヤモンドネックレスは、ここも2.1/4馬身差で制して連勝。

陣営が3戦目に選択したのが10月5日にバリロンシヤンで行われたG1マルセルブーサック賞（芝1600m）で、ここも1馬身差で制した同馬は無敗の3連勝でG1初制覇を果たして2歳シーズンを終えることになった。

そして、セントマークスバシリカの初年度産駒からはダイヤモンドネックレス以外にも、G2メイヒルS（芝8F）勝ち馬アイリン（牝2）が出現。欧州フレッシュマンサイヤランキングで、スターマンに次ぐ2位につけている。そのアイリンもまた、タタソールズ10月1歳市場にて60万ギニー（当時のレートで約1億2573万円）で購買されており、サンブルは極めて少ないながら、セントマークスバシリカ産駒は高い牝馬が走るというパターンが形成されつつある。